

少佐は今横須賀に入つてゐる軍艦の砲術長で俊夫とは知合の仲だつた。
「別に東京も變つたことがないだらう、いやちよつと天長節を利用してな、横濱まで遊に出かけて来たよ。」

こんな話を交換してゐるうちに、少佐はふつと靴の爪先に落ちてゐた紙殻に目をつけて

「おい、書類のやうな物が落ちてゐるのが、君のぢやないか。」

と注意した、俊夫は

「いゝえ。」

と首を掉つた。少佐は氣になると見えて、體を曲げながら其を拾はうとした。

「アツ、僕のでした！」

俊夫は頓に慌て出して、伸した手にいきなり拾ひ上げた。そしてこそく〜と衣兜深く仕舞込んだ。

一七四 伴のことで

横須賀でその少佐と一緒に汽車から降りた俊夫は、海兵團の宿舎に歸つて夕飯を済ましてから、静かな室に入つし日記を書かうとした時に、ふと歌のことを思ひ泛べてひとりて苦笑した。そしてその紙反故を衣兜からとり出して、日記帳の上にひろげながら再び讀耽つた見て了つてから又苦笑して机の上に抛り出した。抛られた歌は日記を書いて了ふ迄、裏返しになつて其處にあつた。頓て兵事雜誌の下に布かされたなりに、就寝時間の近くまで其儘棄て、置かれた、机を片付ける時に彼はそれを見つけて出して、急いで手に取揚げた。又ちらりと目を徹してから、少頃躊躇つてゐた、傍には燐寸もあつた、足下には紙屑を投入れる小箆もあつた、けれど彼は焚きも破りもしなかつた。ちよつと指で皺を熨して、劬はるやうに四折に疊んでから、本の頁の中へ挟み込んで高い書架の上のせた。

翌る日の午後、父の中將から手紙が届いた。俊夫の機嫌が急に變つて来て、平生眞面目な顔が一層嚴肅になつたやうに生徒に見えたのは、それから後のことだつた。「どうもますます不可ん、何だつてこんな莫迦氣きつた喜劇をやらせ居るのかなあ。是ぢや誰だつて怒る譯だ、あゝ絶望！ 絶望！」

課業が了つて稍と弛みかゝつた頭腦へ突入るやうに、彼を却かした此の新らしい出来事が、泣きたいほどの悔恨をそゝり立て、聲なき叫を苦しく繰かへさせた。その手紙には電話の不始末を理由として、眞島に謝絶の宣告をしると命令的にやかましく書いてあつた。

「併しそれは少し過激だ、一應事實を調査した上でなければ……。」

かくても猶彼は「友人に對する眞心」を楯にして、力の讀く限りはと踏みこたへだ、未練かも知れないが今度の日曜には最う一度出京して、呟と吉ちやんを面責した上でどいふ考へに、いつも胸に食込んで來る心配を突戻してゐた。

ちやうど土曜日の午後だつた、三時の汽車で東京へと思つてゐる所へ面會を求めた者がある。名刺には眞島茂兵衛とあつたので、直に吉ちやんの父だといふことが知れた、應接所へ通して置いて置いて見ると、鐵色のごりごりした羽織に、柄のくすんだ紬らしい小袖を著た老人だつた。

「貴君さまが大原さまの御子息様でゐらつしやいますか。いや御用多の所へ飛だ失禮を……手前があの吉太郎の親で茂兵衛と申しますので、どうぞお見置きください。さいまするやう。俸は又たいろくと御引立に預りまして、何ともはやお禮の申し上げやうも……。」

是だけの口上が機械的の細かいお辭儀の下かつぽつりくと刻み出される。俊夫は挨拶に困つて、いやあいやあとばかり懸聲してゐた。

「えゝ、今日出ましたのは外のことでも御座いませぬが……えゝと、お差支はございませぬかな、二三十分の所……。」

「差支はありません。」

俊夫はちよつと腕巻時計を見て言つた。

「左様でございますか。」

漸く腰を落つけて

「實は倅のことでげして。」

「おゝ如何しました。」

「いや何ともはや。」

額に小皺をよせて

「親の口から這廢事を申上げるのは實際辛うございりますが、どうかお聞苦しい話も

御懇意にして下さいました好誼だと思召して、お聞取りくださるやうに。大原さん

私は最う只た一人の倅を捨てる覺悟で出てまゐりました。」

濡んだ聲の下からほろりと白い雫を落した。

一七五 情死する

「えッ、棄てる!?」

俊夫は目色を變へて反かへつた。

「そりや如何いふ譯ですか。」

「いや耻を申さなければ事情もお分りになりますまいが、此頃非常な放蕩者になり

ましてなア。」

「む。」

思ひ當るやうに頷く。

「商學校を出まするまでは彼廢では御座いませんでしたが、稍と世の中に顔出しをするやうになりますと、一ばしの實業家にでもなつた氣で、やれ會社を立てるんだとか直輸出をするんだとか、まるで熱に浮されたやうなことを申しまして、それ表

服だ時計だ、やれ自動車だ宴會だとくだらなく金を使ふんでムいます。餘り莫迦莫迦しいから偶には叱言の一つも言ひますと、そんな頭は古物保存會へ出品したらいいでせうとか、私の仕事は世界を相手にするんだとか大きなことばかり申しましててんで耳に入れません。が、併しそれも修業の一端、よかれ悪かれ後の經驗にもなることだからと胸をさすつて見てゐました所が、此の秋になつてからと申すものはやれはやとんと手も著けられない放埒者になりました、まるつきり家へも寄つ著かすに方々のお茶屋待合、どこでもござれと遊んで廻る如な始末でげして、實に如何とも持餘して了ひました。」

是だけ話してほつと息をする。いかに活氣のない鈍調な老商人らしくはあるがそれでも家庭の重い惱に打たれた心の呻きが、その顔深く彫まれた皺の一つ一つに動いて見えて、傷ましげに俊夫の同情を惹いた。

「はゝア、それは御心配ですな。どうして又たそんな墮落を……。」

「併し世間にはお立派なお邸方でも、不良少年なんてえのものがお出きなすつて、やれ掻ばらひをしたとか脅迫をしたとか申しては、警察沙汰になつて親御様のお名を汚すやうなことも随分有るさうですが、夫から見ると手前どもの倅などは、只金を使ふだけのことですから、まア〜いくらが良い方だと氣を弛して居りましたところ、いや飛んでもない。」

と言ひかけて少頃喉をぐうぐういはせてゐたが、瞬きしながら涙をかんで「とう〜不良少年以上のことをやらかしました。大原さん、まア是を御覽ください、眞箇に呆れるぢやございませんか。」

顫へる手を合財袋の中へ差し込んで、一束にまろめた艶書様の物を出して、それから一番上にあつた一通の手紙を抜いて

「これは昨日江の島から出した倅の手紙ですが、言草もあらうに女と心中するんで御座いますとさ。何ともはや言語同断な馬鹿野郎で。」

「えッ、心中!？」

俊夫は驚いて手逸くその手紙をとつた。

「江の島に来て居るんですか、吉太郎君は。」

「はい、ちやうど五日も前から何處をどう腕くり廻つてゐたのか、鐵砲玉のやうになつてましたんで。」

「見るといかに江の島の岩本の印を打つた封筒で、中味は二尋許の長さに大きな字を擲り書にしてあつたが、菊子と添はせてくれなければ兒が淵で情死をする、その決心で出て来た以上は誰が来ても歸らぬ、二人の死骸は一緒にして葬つてくれといふのが、煎じ詰めた概念だつた。俊夫は苦い顔をして見て了つてから

「いやア、えらいことを行いますなア、ハ、ハ、ハ、ハ。一體此の菊子といふ女は何者ですか。」

「さア、それで御座いますよ、伴をこんな阿房にしたのは………御参考までに御覽

に入れようと思ひまして、此處に寫眞を持つて来ました。」

「それは用意周到ですな。」

一七六 親ごゝろ

茂兵衛は合財袋の中から手逸くその寫眞を出して俊夫の前に置いた。見ると権色の紙に埃及模様を浮出させたさつ、つゝをかぶせてあつて、それを開けると、プロマイトの印書を紫に艶出した女の半身像だつた。夏撮つたんだと見えて白い洋服に、メレーウエド一形とやらいふ大きな帽子を冠つて、右の手に花束を持つて、表情を見せるつもりなのか、不自然な風に口を開いてにこ〜笑つてゐる顔——それが何處かで見つたやうだと思はれるのも道理、吉ちゃんといつか自動車に相乗してゐた女に紛れなかつた。

「あゝ、是ですか。」

俊夫は成程と頷いて

「變な服装をしてゐますあ、何です!? 本體は。」

「よくは分りませんが、横濱で通辯をしてゐた男の娘だとやらで、あの何とか申しましたな、近頃そちちに流行してゐます、それ高等居酒屋のことを……私なんぞはつい窺いて見たこともありませんが……。」

「カフェーですか、バーですか。」

「爾うく、その爺だか婆だかに居たこともあれば女優になつたことも有るし、それから雑誌の女記者とかに早變りして、一時は自分でお茶屋を出したことなんかも御座いますさうで、何でも肌のいゝのが自慢ださうでして、何時のことだか知らないが裸の展覽會をおつ開いて畫工の御定連から木戸錢をとつたことも有るといふ……。」

「それはモデルでせう。」

「何といふのか知ませんが、いやはや聞いたばかりで慄然とする大變なしろものなんで。まア此處に持つて來ました其女の艶書を御覽下さいまし、筆で書いても用が足りるのに、態々細いペンで紫の墨汗なんか使つて、胸の悪嘔くやうな厭らしい文句をでれくと列べてありますから。」

「ハ、ハ、爾うですか。何しろ飛んでもない奴に魅込まれましたね。すると吉太郎君はその女と一緒に江の島に出かけて居るんですな。」

「はい、それで打棄つとかうかとは思ひましたが、私にとつては只一人の伴ではあり、いつまでも馬鹿者にして世間様の笑ひ物にさせたくも御座いませぬので、諭にも子を持つては七十五度泣くとかいひますが、何度泣いても人並の子供にしたい親の未練から、實は貴君様へお願に出ましたのでムいませぬ。と申すのは貴君様からはあの縁談以來特別にお引立下さいました關係上、大變に信用致しまして、平生貴君様のお噂ばかり申してゐた位でムいませぬで、現場へお出張くださいまして、手ほど

い御説諭を加へて下すつたら、始めて自分の悪かつたことに気がついて、本心に立返ることもあるかと、まア箇様に考へますで、はい。假令改心いたしませんにもせよ、その虱のやうな女を突放させて下すつたわけでも、どんなに助かるか知れません。親から異見をしましたんでは全然燈心で竹の子、耳にも入れることぢやムいませんので、止むを得ず貴君様へ無理なお頼を持たしましたやうな譯、どうぞ吉の體一つを救ふのだと思召して、何分の御盡力をお願ひ申します。はい。」
嗚々と切ない心を打ち明ける下から、頻りに水涕をかむのであつた。
「よしッ、承知しました。」

俊夫は快活な調子できつぱりと答へた。

「御同情します。爾ういふお話を承れば假令そのお頼がなくとも、友人として放任する譯にはいかんです。實はそんな風評もちらと耳に入りましたので、今日東京へ出た序に御子息に會つて、實際の情況を確めようかと思つてゐた所でした。幸

です、直と参りませう、貴老も御同行下さるでせうな。」

「はい、是非お伴をさせて戴きます。いや早速の御承諾で有り難う存じます。」
茂兵衛は最う嬉し泣をしてゐた。

一七七 江の島

吉太郎が菊子といふ女を連れて岩本樓に来てから、今日でちやうど六日になる。鮑とりの波から這上る滑稽な顔や、龍窟の飛沫に蠟燭の火をとられる凄い氣分や、そんなのを珍らしがつたのはほんのはなだけ、貝拾ひや古蹟めぐりもそろそろ飽きて來ると、壺焼の匂にさへ胸悪く刺戟されて、始めは枕の上でうつとりとさせられた松風や浪の音すら、やかましいものゝ一つになつた。

「あゝあきくして了つたなア、早く東京へ歸りたい、都が戀しい、歸らうか、菊ちゃん。」

「逢ひたいのでせう、櫻さんに。」

「又さういふ邪慳を……田舎は神これを造るとか詩人が歌つてゐるけれども、僕等にはやつぱり人間の造つた都會の方が向くやうだ。單調でねえどうもいかんよ、這麼處は……都會趣味なるかなだ。おい、あの刺戟の強い色彩と華やかな空氣に包まれた新橋あたりの今宵はどうだらう菊ちゃん。冷たく冴える三絃の音にさ、衰へはてポプラの葉が秋の命のさればしのごと、紅い町の灯を浴びながらほろ〜と散るかね。あゝ戀しくなつた〜。」

「へん、ごまかしてゐるわよ。戀しいのは下町でなくつて山の手の方でせう、三絃でなくつてピアノでせう、ポプラでなくつて櫻でせう。あツ癪だツ、そんなに戀しけりや勝手にお歸んなさい。いゝわよ、私一人で死んぢまふから……あゝ口惜しいねえ。」

「危ない、あツとう〜菓子器を壊して了つた。しやうがないねえ、恚う癪癪家ぢ

やあ。昨日も鏡臺を一つやつつけちまふしさ、今朝は眞の火で僕の手へ放火をしたぢやないか。冗談ぢやないせ、菊ちゃん、御覽な、まだ火膨れになつてチ〜いつてゐるから。」

「自業自得よ、貴郎のやうな不誠實な方は、夫くらゐの制裁をしてやつてもいゝわよ。餘程ひどく苛めて上げなけりや、その心臓から櫻ツてえ悪魔が放れていきやあしないわ。」

「そ、そんなことは斷じてないといふのに、お前も疑深いねえ。彼の女はお前のいふ通り、と、俊夫といふ奴に横取されつちまつてるぢやないか。」

「だから諦めてお了ひなさいよ、ねえ、俊夫ツてえあのヘナチヨコ軍人がいゝ加減に貴郎を莫迦にしてゐるのよ、ねえ、爾うでせう、でなけりや彼様電話の挨拶つてえものが有るもんぢやないわ。絶交なさいよ、ね、貴郎も立派な紳士でせう、男爵の中將が何だつてんですよ、ちやんちやら可笑しい、見返しておやんなさいな。」

「む、實に心外でならんよ、明日にも絶交状をかいて遣るかねえ。」

「それは爾うと甚麼したんでせう、お宅の方は……餘り遅いぢやありませんか、最う何とか云つて來さうなもんだが、随分感じの鈍い方ね、貴郎のお父さんといふ人も。」

「さ、如何いふ心算かねえ。あゝ胸がもしやくしやして堪らん、菊ちゃん、麥酒、麥酒だ。」

「又暴酒、オホ、。ア、貴郎、明日まで待つて見て誰も來ないやうだつたら、仕方がないから決行しようぢやなくつて。」

「えッ、眞箇に死ぬのか。」

「憚りさま、命に他行はありませんよ。ちよいと冗談子に試運轉、豫行演習、ぼちやくツと入つて見るのさ、オホ、。。」

「夕飯が濟んでから海邊の崖に近い小座敷で、二人は所在なさの痴話喧嘩に花を咲

かせた擧句が、ひそくとこんな話をしてゐた。と、椽側づたひに忙しい足音をさせて宿の女中ば入つて來た。

一七八 狼 狼

「旦那様、お客さままでございます。」

女中が恚う取次ぐのを聞くと、肱枕をして臥てゐた吉太郎は飛上るやうに起揚つた。

「來たか、いや占めく。ど、どんな奴が來た。左の目が藪睨みのやうになつてるんなら家の番頭だが、それでなければ額に瘤が出つばつて、眞中からツンと一本長い毛の飛出してゐる男ぢやないかね。」

「いゝえ、違ひます。軍服を召してらつしやるお若い方ですが……。」

「なに、軍服？ 誰だらう。僕の親戚に軍人なんか居ないかね。あゝ分つた、小網

町の新さんだ。アハ、親父、考へたね、ウツフツフ。」

「新さんて、どなた？」

傍の菊ちやんが訊いた。

「僕の従弟、去年から近衛に入營つてる兵隊さんだ。子供の時から仲好で、さんざ苦勞をしたいけに能く人情を理解してる男だもんだから、親仁が見立てゝの特別任務さ。新公の乗出して来る所を見ると、こつちの要求は全部無條件の承認かな、こりや。ウフ、親父も隅に置けないア。菊ちやん。」

「此頃のお父さんはみんな新らしくなつてゝよ。ぢやあ成功だわ。」

「勿論。おい、姐さん、その兵隊さんなら此處へ通してもいゝよ。それから未だ夕飯前だらうから、澤山御馳走をしてお呉れ。」

「畏まりました、ですが旦那、兵隊さんなんかぢやムいけませんよ。立派な海軍の士官らしうございますが。」

「えッ、海軍だは？」

吉太郎は吃驚して菊ちやんと顔を見合つた。

「な、な、何といふ名前だ、おいッ。」

「確か大原さんと被仰いました。」

「なにッ、大原！」

ぎくりとして目を睜つた。

「あ、彼奴、な、何だつて這處所へおい、居たと言ひやしないだらうね、斷つたらうね。」

「いゝえ。」

笑ひながら首をふる。

「困つたねえ、菊ちやん。おい、僕一人だと言つてくれたらうね。」

「いゝえ、先様は御承知のやうですよ。女の連があるだらうとお聞きなさいますか

ら、番頭さんは御座いますと申し上げましたさうで。」

「チョツ、何てえ氣の利ない番頭だらう。おや何か様子を聞たのか。」

「は、二人は如何してゐるつて……。」

「始終齟齬ぎ込んでると言つてくれたらうなア。」

「いえ、私なら爾う申しますがね、律義な番頭さんのことですから、大層御陽氣にお遊びなすつて御酒を。」

「あゝ、忌になつちまふなア。」

「お通し申ませうか。」

「眞平だ、断つてくれ。御馳走は取消す取消す。」

と、菊子はくすくす笑ひ出して

「貴郎も莫迦ねえ、そんなこと如何でもいゝぢやないの。遇つておやんなさいよ。お遇ひなさいよ。」

「と云つたつて……。」

「いゝわよ、悪魔の使だと思つて遇つたらいゝでせう。多分お宅から頼まれるかどうかして、談判に來たのよ。一息に吹飛してお了ひなさいな、そんな奴。」

「でも剛情な軍人だからなあ。」

「臆病ねえ、貴郎は……勇氣をお出なさいよ、堂々と議論をして回ませてやるといゝわ。私も蔭の方から應援して上げてよ。」

「ぢやあ、兎も角遇はうかねえ。」

「ちよいと、櫻のことなんか話に出したら承知しないことよ。先方から言出したら決然と断つてお了ひなさいよ。いゝこと。私、面と向つて男らしく意思表示をする所を見たいわ。」

「むゝ、よし〜。」

襦袢の儘で表へ出て見ると、大原少尉は玄關先に立つたなりで待つてゐた。別に

怒つたやうな顔もしてゐなかつた。そして秘密の事件だから山の方へぶらつきながら話さうと誘ひ出した。吉太郎は草履を突かけて黙つて其跡について往つた。

一七九 月の社

空には明るい月が出てゐた。二人は貝殻のまじつた爪先上りの狭い道を、茶屋町から下ノ宮の境内へと入つた。暗い木立から囁く如な寂しい音を立てぼろ〜と落葉してゐた。

「君、どうして分つたんですか、不思議ですわねえ、家に聞いたんですか、え、大原君、爾うでせう。」

「……………」

「家の親父から手紙でも上げたんですか、で、僕の此處に居ることが分つたといふやうな譯ですか。」

「……………」

「どうも意外ですわねえ、君が来ようとは全く豫想してゐませんでしたよ。實は例の神經衰弱でねえ、ごたく〜した處に居られんもんだから、静養の必要を感じてねえ。」

餘りに突然だつた舊友の訪問に、底深くつきまとつてゐるらしい不安の消息を探らうとして、吉ちやんは荐りにかまをかけて見たが、俊夫はその舌たるいねえ〜といふ口癖にも、一種の懐し味を覺えた曇りの日の氣分から離れた人のやうに、堅く口を結んで返辭すらくれなかつた。その他々しい仕打がいと猶吉ちやんを薄氣味悪く思はせた。

「まア黙つて行か、君に遇ひたいといふ人が来て居るんだ。」

金龜樓の前を通り抜けて上ノ宮の石磴を上る時に、俊夫はやつと是だけのことを言つて聞かせた。

「え、僕に遇ひたい？ 誰ですか、櫻さんですか。」

「……………」

又無言になつた。

「櫻さんなら僕も少し衷情を告白したいことがあるですが……………君、大原君、僕、妙なことになつてねえ。」

石磴を上り切つて神社の前に出た刹那、いきなり華表の陰から

「莫迦野郎!!」

と叫んで躍出した者があつた。吉ちやんは喫驚してたちろいだ時に、早くもその腕が胸へ懸つた。

「き、き、汝ッ、よくもよくも。」

「あッ、お父さんですかッ。」

吉ちやんは愕然として飛揚つた、急いで兎脱けようとしたが、生憎と懐へ入れて

ゐた手が出なかつた。茂兵衛は切齒をして、どてらの襟の縫目がびり／＼と切れるまでに、ありたけの力を絞つて小突廻した。

「な、な、何を爲さるですかッ。」

「何を爲さるかも知ないッ、こ、こ、此の狂人奴ッ。と、と、老人を莫迦にして、奴ッ。よくもこんな心配を懸けやがつたッ。き、き、汝の如な不孝者は、こ、殺しても腹が癒えないッ。」

「こ、殺すッ、それは亂暴でせう。此の生命は貴老の物ぢやないです。」

「喧しい、俺が勝手に殺すんだ。」

「殺されるなら殺して見るがいます。ば、僕の身を蚤や虱の昆蟲動物と間違へちやあ不可ませんですよ、お父さん。」

「何をッ、汝なんか蚤や虱にも劣つた奴だ、さア此方へ来いッ。」

「何處へですか。」

押したり押されたりしてゐるうちに、茂兵衛は下駄の鼻緒を踏切らして、どつちから仆れたともなく、折重なつてはたりと敷石の上へ轉り合つた。俊夫も黙つて見てゐられなくなつて、急いで二人を引分けると、吉ちやんは鼻眼鏡を潰して了ひ、茂兵衛は股に擦過傷を拵らへてゐた。

「真島さん、まア御立腹なさらすに暫く僕に任せて置いて下さい。吉太郎君も何にも言ひ給ふな。」

其時、下の石礎を躓つて来る黒い人影が、臈げに俊夫の目に映つた。

「おい、君、もつと奥へ行かうぢやないか。真島さんもお出ください。」

一八〇 夜寒の丘

俊夫は先に立てすん／＼歩いた、吉ちやんは餘儀なさうに後に跟いた、茂兵衛はその腰を抑へないばかりにして警戒しつゝ、インパネを抱へた手に鼻緒の切れ

た下駄を提げて、足袋跳のまゝ石礎を上つた。

頓て島の頂上の出ると平地になつて、左の方の懸崖下に打突る濤が、ちやうど汽車が鐵橋の上を通る時のやうな凄い咆哮を、びり／＼と谷底に震はしてゐた。

「さア君、是へ懸けたまへ。」

俊夫は崖際の茶店に人の居ないのを見て、葎簀の陰から床几を引張出して来て、先づ吉ちやんに腰をかけさせてから自分も其の横に列んで、衣兜から葎を出した。

「君、過日は失敬したよ。電話を待つんだつたが急いで歸つたもんだかね。さア點けたまへ。」

「有難う。」

吉ちやんは出してくれた燐寸の火を紙葎にうつして

「いや、私こそ飛んだ失敬をしたですよ。」

「どうだ、島のホテル生活は、愉快だらう。僕も少しあやかりたかつたな、アハ、

。」

「なアに詰らんですよ、アハ、。」

表面には何の嬉りもなさうな、相變らずの快活な少尉に見えたけ、吉ちゃんは一層底氣味悪くなつて、強ひて取つて著けた空笑もどうやら間が抜けてゐた。親父はと見ると前の石に鮫子張つて、呼吸をあらくしながら魔のやうに睨めてゐる。

「アハ、爾うか、やつぱり家で眞黒になつて働いてゐた方が誰でも愉快なんだなア併しそんな詰らん處へ君、何しに來たんだい。」

「だから先刻も言つた通りさ、神經衰弱の静養を兼ねて、その……。」

「どうして又た那廢現代病に取著れたんだい。流行を逐つた譯か。」

「いや、爾ういふ譯ではないです。なるだけの原因があつて……。」

「その原因は。」

笑ひながら訊く。

「原因は家庭の煩悶……。そ、爾うです。その壓迫に堪へるには、餘りに私の意思が弱いですからねえ。同情して下さいよ、大原君。」

慌て氣味に爾も哀れつぼく聲を顫はす。

「よし分つた、つまり君の意思を抑へる者があつて家庭の上に徹底させないもんだから、それで煩悶したんだといふやうな譯だね。」

「爾うです、爾うです。」

「併しその原因の上に、もう一つ重複つて眞の原因があるだらう。」

「そ、それは……。有りませんがねえ。」

「有るよ、考へて見たまへ。流行語でいふと自個省察さ。」

「いや、私には別に反省するだけのことが無いですがねえ。寧ろ他動的に」

「おいッ。」

俊夫は急に聲を鋭くした。

「何故正直に酒と女ですと言はん。酒と女が私を墮落させました、私の煩悶は墮落した地獄の火ですその火の焚かれて私の良心が灰になつて了りましたと、何故言はん。」

「……………」

吉ちやんは顔を紅くして黙つて了つた。

「いや、それは可いとして。」

少頃してから俊夫は語氣を和げて

「時に君に訊くことがあるがね。例の櫻の問題さ、あれは君、どうする心算だい。」
「憚う言ひながら波に雲母する月の光の、相摸灘一杯にひろがつたのを眺め下したその目は次第に左へ向いて、鎌倉あたりの靡げな山影から七里ヶ濱にちらつく裸火に落ちた。森の梢、冬枯の薄。そんな物を一わたり飛越して、山の根の崖の處へ來ると忽ちびたりと停つた。」

其處には黒つばいマントを着て、崖際に寄添ひながら頻りに此方を注意してゐる人があつた。縞のシヨールの上に出た白い顔がまともに月に映つて、雪の如く照はえて見えた。俊夫は點頭いてそつと目を舊の位置に復した。

「ね、君。如何する考か、それを聞かして呉れないか。」

一八一 忠告

吉ちやんは其の答に躊躇つて、少頃唇をもぐさせてゐた。

此處へ來る途々、君のお父さんにも御意見を伺つたがね、お父さんは逆も見込がないから、櫻の方を断つてくれいと被仰るのだ。が、併し此事は君から直接に依頼されたんだからな、兎に角本人の意思を確めた上でなければ、専断に断る譯にもいかんとお答へして置いたやうな譯だ。」

「そ、爾うですとも、わ、私を度外にして、爾ういふことを被仰るお父さんは第一

出過ぎてゐます。一旦同心をして置きながら、今になつて夫れを打壊すといふ、そんな矛盾した不道德の……。」

「何をツ、無盡も頼母子講もあつたものかッ。汝のやうな馬鹿者に來る女があるか無いか、まアそれから考へて見ろ、魔拔奴ツ。」

茂兵衛は目を剝出して怒鳴つた。

「まア〜黙つてゐて下さい。」

俊夫はそれを制して

「すると君が最初僕に訴へて來た時の衷情は、今だに持つてゐるんだね。つまり櫻に對する愛さ、その愛はまだ滅えずに君の胸に燃えてゐるのかい。それが根本問題として研究さるべき大事な骨子だかね。」

「いえ、それは無論です。眞の戀は時間や空間を超越してゐるですからねえ。君。虹のやうに直と消えるやうな脆い戀なら、それは一時性の遊戯的戀愛と謂ひつべき。」

もので、ほんとうの心の底から……。」

「那麼くだらんことを言ふ必要はない。君は櫻を妻君にしたいのか、しなくとも可いのか、夫を聞くのだ。」

「いや、それは……聞かなくとも解ることですわがねえ。一旦私の心を染めた強い色彩は、永劫消える時がないですがねえ。」

其時俊夫は、絶えずさよろ〜と宙をさまよつてゐる吉ちやんの目から、切かされたやうな怪しの光が流れるのを見た。知らぬ顔をして其視線の行衛を打目成ると正しく崖際に身を潜めたマントの女に向つて、十度の角度に射られてゐる。女の方はハン、チを振つたり手眞似をしたりして、何か頼りと合圖をして居る様子だつたは、あ彼女だなど俊夫は思つた。

「ぢやあ結婚する氣だね。」

「誰とですか。」

「櫻とさ。」

「いや、櫻なら……。」

妙にどきまぎして

「御免です。はア。そ、そんな氣は今ちやありませんねえ。」

「爾うか、よしッ。」

俊夫はぎゅつと口を結んだ。吉ちゃんはおホン／＼と盆の窪をぬけるやうな咳ばらひをした。

「おい、君。」

俊夫は轟乎と立つて、沈痛な聲で呼んだ。

「僕は今度の事情につるては何にも言はん、只だ少年時代からの友人として一言君に忠告するがね、どうか好い加減にして放蕩をやめて呉れないか。君が此處に墮落した動機を聞いて見たら、或は同情すべき點があるかも知れんが、假令有るにもせ

よ、今日の行ひを見たら誰だつて同情する者はあるまい。只た一人の年老られたお父さんに御心配をかけて、遊び廻つてるところの沙汰ぢやないぢやないか。世間の批難や嘲りはどうでもいゝとした所で、直接悪い影響をうけるのは君の家庭だ、君の事業だ、いや君の品位だ、將來だ。君はそれらの貴い物を土芥よりも價打のない此世の歡樂、酒や女と取つかへこに捨てるやうな莫迦者でもなからう。君には長い未來があるぢやないか、爲すべき多くの事業があるぢやないか、何故自分を葬るんだ。何故目を開いて自身を顧みんのだ。此のお父さんは君のことを心配なすつて、夜の目も寝ずに非常な煩悶を續けて居らつしやる。それが君には分らんか、分つても打棄つとくのか、親に心配をかけるのが善いことだと思ふのか、君は人道を解してゐないのか、良心が無いのか、有つても麻痺したのか。おいッ、吉太郎君、お願だッ。目を醒してくれッ、おいッ。」

肩に手をかけて振動かしながら、燃えるやうな瞳で其顔を視詰めた。茂兵衛は堪

らなくなつて泣出した。

一八二 飛込め!

と、吉ちやんは冷笑ふやうな目つきをして、腮を前に突出しながら、
「いや折角の御忠告ですがねえ、大原君、それは少し公平を缺いてるですよ。原告の申立ばかりを信用したんちや、裁判も片手打になりますからね。えどうか被告の側にも立つて考へて見て下さいよ、苟くも世界に雄飛しやうといふ新しい青年がさ、土の中から掘出した怪鳥の骨よりも最つと古い人の犠牲になつて、親だの子だのといふ那麽不徹底な舊道德の枷に喉をしめられて、きい／＼言はせられてゐられまいぢやありませんか。ね、爾うでせう、不平あればこそ其の慰安を求める必要もあるんです。慰安の方法は何であらうと、それは私の自由意志で撰擇したことですからねえ、敢て他から干渉すべき性質のものぢやないでせう。」

と空嘯く。俊夫にはどういふ意味なのか其の言つたことが支離でさつぱり解得めなかつた。

「ちや君は、今の自分の行ひを善いとだと思つてゐるのかッ。」
「善いか悪いか、そんなことは知らんです。又知る必要もない。私の生活は絶対に自由です。君は道樂は罪惡だといふけれども、罪惡といふその定義からして不徹底のものぢやないですか。哲學的に研究したら大なる疑問ですせ、大原君。」

「何が疑問だッ。」

俊夫の腕はぶる／＼と顫へた。

「私を道樂者として排斥したいなら勝手に爲るがいでせう。道樂も一種の信仰、人のいはゆる墮落が私にとつたら。寧ろ意義のある向上かも知れんですからねえ。」
凡てが常識はづれの熱病患者の謔言のやうに聞えた。俊夫は帶劍の柄をぎり／＼と握りつめて、情なさうに吉ちやんの顔を睨み詰めてゐたが、頓て乾となつて。

「それでは僕の忠告を、き、き、君は耳に入れてくれんのだなッ。」

「好意は感謝するですかねえ。理解のできない言に服従しろといふのはそりや無理でせう。ね、爾うでせう。」

「よろしいッ。最う言はん、その代りに僕は君の友人として盡すべき他の方法を實行して、君の便宜を計つてやる。待てッ。」

叫ぶと同時に身を翻して颯のやうに左へ飛んだ。吉ちゃんも驚いてアッといふ間に、逃げそこなつて前に踏つた怪しの女は、俊夫の臂に袷首を引摺られたまゝ、崖際からする／＼と曳摺られて来た。

「あらッ、何を爲るんです。ら、亂暴なッ、貴君、どうなさるんですよ。あれッ、痛いぢやありませんかよッ。」

肩からすりこけたマントの陰に、眉を蹙らした真白な半面が明るく月に映し出された、吉ちゃんも蒼くなつてひよいと床几から飛上つた。それが例の菊子だつた

茂兵衛は喫驚した顔をして二人を見瞻つた。

「おいッ、吉太郎君。」

俊夫は足下に女を曳据ゑて置いて聲高く呼んだ。

「君は此の女と心中をするんださうだな。至極よい、君としては此上もない曠の事業だ。この江ノ島くんたりまで出かけて来て、何處から流れ込んだか系統の知れないベスト菌のやうな女と心中をする、面白いなア、おいッ。さうして大馬鹿者の名譽を死後に残すのは實に愉快だ。さア遠慮なくやり給へ、僕も友人の義務だ、その場所に立會つて快く君の首途を見送らう。さ、其處の崖がちやうどお詔への死場所だ、早く飛込めッ！ 飛込めッ！ おい、何を愚圖々々して早くせんか、おい！！」

一八三 制 裁

いきなり度肝を抜かれた吉ちゃんは、ちやうどブランデーに酔つた人のやうに、全身の神経を痲らして了つて、たゞ茫と瞬る眼の光にだけ、いちけ切つた感情のわななきを見せてゐた。

「む、飛込めやしないだらう、そんな勇氣は君には無からう。」

俊夫は冷笑つて曳据ゑた菊子をぐいと小突いた。

「おいッ、女ッ！ 汝は此男を手玉にとつて散々おもちやにするくらゐな凄惨な化物だから、崖から跳ることなんかは朝飯前の割引電車をチヨツコラサと飛下るやうなもんだらう。約束をしたことならどうせ遅かれ早かれ突合をしなけりやならない。如何だ、一足お先に御免を蒙つて、冥途の停車場で待つことにしちやア。

心中は慙うして爲るもんだとお手本を出さなけりや、此男は氣怯れがして立てないぢやないか。さア汝から先に飛込めッ！」

「可厭やう、私知らないわ、知らないてばさ。痛いぢやないか、お放しよッ、失敬

ね、此の軍人さんは。」

菊子は下で兎脱けやうと腕きながら喚き立てた。

「放さないと言つてよ、私の知つたことぢやないといふのに、分らない人ね。」

「黙れッ、今になつて命惜みをする奴があるか、汝が獨で死ねないなら僕が死なして遣らう。假初にも帝國の軍人の介錯だ。一期の名譽此上もないと思つて立派に死花を咲かせろ。さア此方へ来いッ。」

力任せにぐいと崖際へ曳摺つて行つた。菊子は死物狂ひになつて足をばたばたさせながら、其手を振解かうと躁つた。

「こ、こ、殺すのかい、お前は……私を殺すんだね、殺すんだね。」

「爾うだ、殺してやるッ。汝のやうな悪魔は一日たりとも此世に生存させて置く必要はない、社會にかはつて制裁してやるから爾う思へッ。」

「殺すなら殺すやうに話をつけてからお殺しな。お前なんかに只で殺されるやうな

そんな安っぽい體ぢやないわよッ。」

「なにを、生意氣なッ。」

「若旦那ッ、眞島さん。早く如何かして下さいよッ、何故黙つて見てゐるのさ。あれッ、眞島さんてばさ。」

削り落したやうな断崖の上に爪立て、悲しげな聲を絞つた。吉ちゃんは最う氣も漫ろ、血眼になつて駈寄らうとしたのを、横合から茂兵衛が躍り出して緊乎と抑へて了つた。

「汝、それほど死ぬのが怖いか。よくそんなことで男が誑せるな。」

「か、勘忍して頂戴よッ。た、助けてくださいよッ、あれッ貴君ッ。」

「助けてくれといふなら助けてやる。が、眞島の關係を断つかッ。」

「断ちますとも、断ちますよッ。」

「よしッ、それでは直と此處から歸れ。眞島に構はずと東京へ歸れッ。」

「え、歸ります。こ、こんな處に一時間だつて居るのは嫌ですッ。」

「是から一切眞島に關り合ふんぢやないぞ。電話で呼出したりなんかすると、俺が飛んで行つて、そら、此通り絞上げてやる。いゝか。」

「く、く、苦しいッ、お、お願ですから早く、は、放してッ。」

「さ、行けッ！」

呼吸もつまるばかり織首を片手に絞つけてから、いきなり後へ突飛すと、花車ぶくりの菊子の體は打球のやうにころ／＼と轉がつて、吉ちゃんの足下にはたりと暗つた。

大正五年四月二十五日印刷
大正五年四月二十日發行

櫻子後編

禁著 無作 斷權 興所 行有
定價 金價 六金 十六 錢
郵稅 金稅 六金 十六 錢

著者 渡邊默禪

發行者 東京市日本橋區若松町四番地 湯淺 策

印刷者 東京市神田區松住町五番地 菅井 十郎

印刷所 東京市神田區松住町五番地 碓文 舍

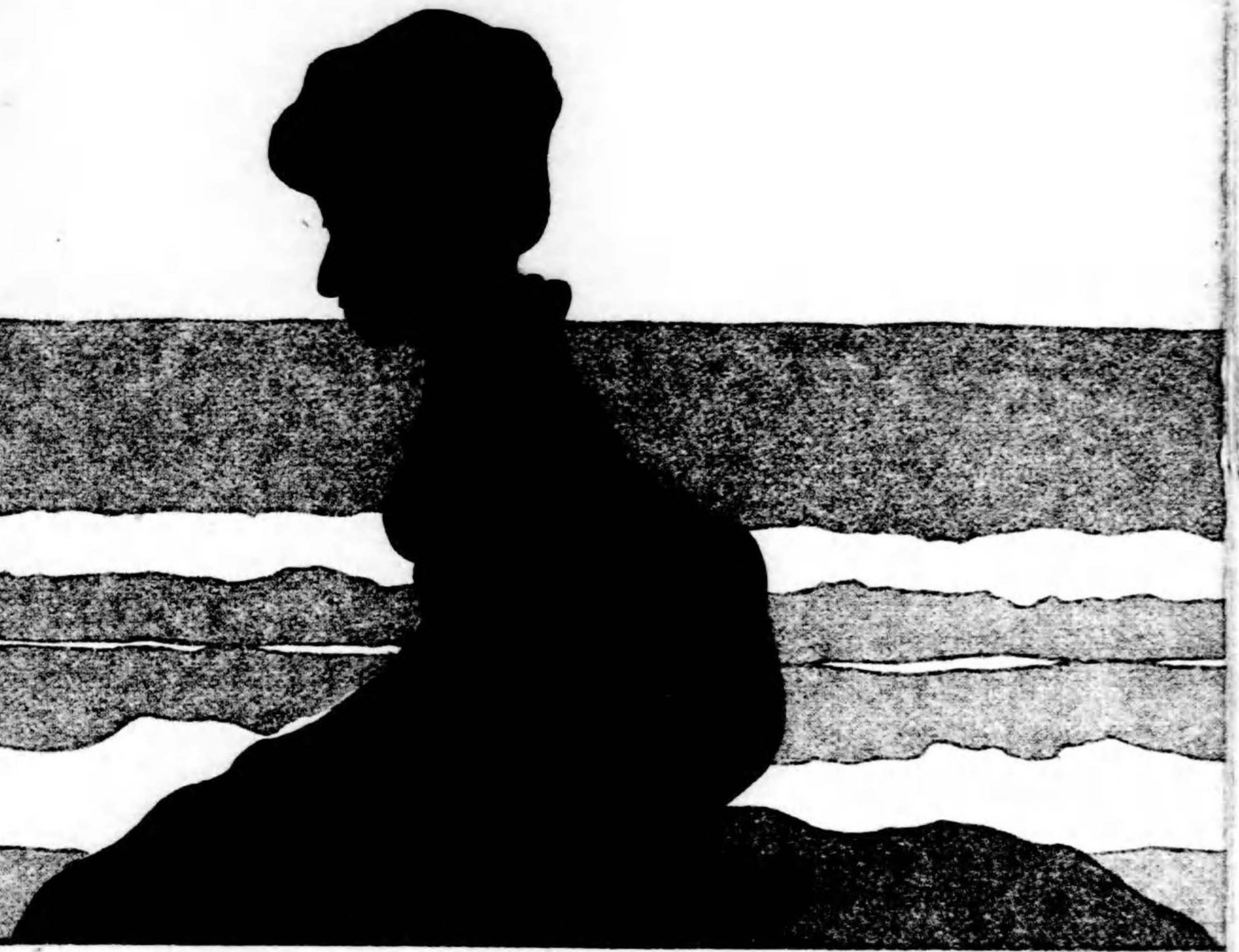
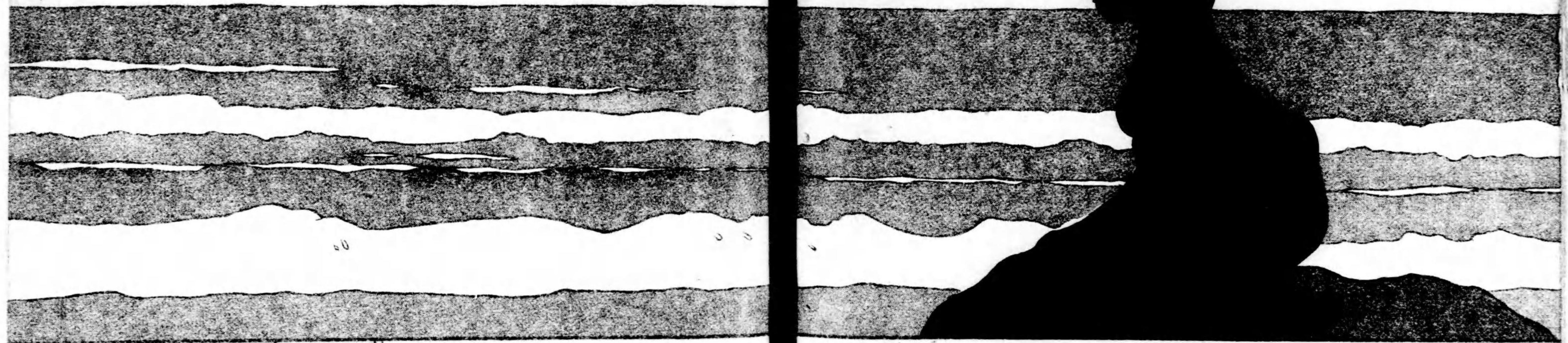
發行所 東京市日本橋區若松町四番地 電話花四八六二 春江堂書店
電話東京一八〇六



圖書叢說小庭式

| | | | | | | | | | | | | | |
|--|-------|--------|-------|-------|----------|-------|-------|-------|------------|-------|---------|-------|--------|
| 渡邊默禪著 | 北島春石著 | 北島春石著 | 小山集川著 | 篠原嶺葉著 | 大橋青波著 | 篠原嶺葉著 | 北島春石著 | 小山集川著 | 篠原嶺葉著 | 北島春石著 | 北島春石著 | 小山集川著 | 渡邊默禪著 |
| さくら子(前後) | 雁一羽 | 片われ月 | 戀の命 | 松葉しぐれ | おもかげ(前後) | もつれ縁 | 呼小鳥 | うさしづみ | カチユーシヤ(復活) | 戀の迷ひ | 憐れの女の一生 | 潮のつ花 | はつ戀 |
| 小山集川著 | 北島春石著 | 北島春石著 | 北島春石著 | 北島春石著 | 花散里著 | 小山集川著 | 北島春石著 | 篠原嶺葉著 | 北島春石著 | 小山集川著 | 北島春石著 | 北島春石著 | 渡邊默禪著 |
| なさぬ仲 | 蝶のまひ | 子寶(前後) | 添はれぬ仲 | 娘一 | 女ざら | 誰が | 紅梅白梅 | 誰が罪 | 歌戀慕 | 涙のあ | 小夜の | ちぎれ雲 | 男狩(前後) |
| <input type="checkbox"/> 錢六金各稅郵錢十六金各價定 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 本美判六四繪口麗歸釘裝美優 <input type="checkbox"/> | | | | | | | | | | | | | |

209
186



終

